

も投稿するのですがどうしても採用されません。何か秘訣があるのですか」と直截と言えば直截、愚直と言えば愚直な質問をして演者であるこの優秀な学者をたじろがせたことがある。

流石に賢明な人だから「それについては一言ではこたえられません」とはぐらかしたが、あとでちょっとした宴席で一緒になつたとき、うち明け話のように次のような話をしてくれた。

「論文を載せるまでには、当然、論文を書かなければならぬし、論文を書くためには実験をしなければなりません。もうそこからが問題で、こういう仕事をしようと思うが、誰と組んだらいいかということもある。

実験は何ヶ月もかかるので、組む相手の家族の状態、例えば奥さんの分娩が迫っているとか、子供が進学にあたつているとか、家族の中に病人がいるとか、などまで考えねばならず、そういう問題がない人でも、この話を持ち出すとしても、今この人の機嫌がいいかどうかから判断してかからなければならないことも多い。

そういう慎重な態度で実験を始めれば、途中で難関にぶつかっても、十分に協力しあえるし、実験が終わり頃になつてきて、ほほめどがついてくると、これならあの雑誌でも受理して審査してくれるだらうという話にもなる。そういう人間関係の積み重ねがいい実験を成功させ、いい論文として結実するのです」

まじめなうえに行動力があり、頭が切れる人でさえ我慢を重ねながら機会を狙っているので

ある。私などにはとうてい出来ないことではあるが、そこをうまくぐり抜けられるというのは、やはり才能としか言い様はない。それでもその人はその人なりに辛抱、我慢を重ねているのである。

前述した文学者水川玲二のようない不羈奔放な人間でも、それ相応に危険を予知したら回避する策を講じたであろう。そうでなければいくら向こう見ずと言つても、七十歳を過ぎるまでは生きていらねまい。一方、全く正反対の生き方をしているように見えるN君の場合でも、それはそれなりに周囲に気を遣つての大仕事である。

安樂死を望むだけの資格と能力

どちらにしても能力を持たなければ出来ない生活で、私のごときものには全くまねの出来ない生き方であるが、大半の人もそれ相応に個人としても、組織の中の人間としても、家族の一員としても、社会の一員としても、周囲に気を遣つて生きているはずである。その意味では生きていることが一番健康に悪いと喝破した養老孟司氏の言葉は至言である。

だが、死ぬまではもう少し余裕があると思う人間は、生きていることが健康に悪いと聞かされても、何となくか、条件反射的か、殆ど習性にまでなつてゐるかは知らないが、周囲といふものにそれ相応に気を遣うものである。それがあつてこそ人間社会であり、家族であり、

組織なのである。生まれることに関しては自分の意志は全く働くことはないし（実際にはある）のだろうがこちらの記憶にないのでから、ないと言つてもいい）、生きているうちはどうしたって周囲に気を遣わなければ生きて行けないようになつていてのが人間の宿命である。

ただ、死ぬということについては、これは自分で決意して実行出来ることであり、いわば人間の出来る最後の一番自由な状態での意志の決定である。考えようによつてはこれくらい楽しむことはないともいえる。だからこそ生き方もなるべく自分の自由にした方がいいし、それが出来ないようならば、安楽死を望むのは、ちょっと無理ではないかと思われる。

永川玲二の生き方についても、その対極にあるようなN教授の生き方にしても、通常の人間が望んでもそう実現できるものではない。N教授はまだ前途洋々たる人であるから、安楽死などを考へるということはないだろうと思われるが、われわれのごとく古希を越える年齢になつたときには、やはり死を意識した上で、何らかの考えを持つことだろう。

そろそろ死期が近づいたら、いくら恵まれた人生を送つたあげくであつても、やはりわれわれと同じように考へるようになるのだと思える。それはそれなりに自分の一一番望む道を歩んだあげくであろうからである。両者の生き方は全く異なつてゐるように見えるし、實際にもそうではあろうが、共通している何かがある。

両者とも異能というか、天才というほどの能力の持ち合わせがある。さればこそ満足できる。

生き方が出来るのであり、そういう自分の思つたような人生を送つた人は、妙な死に方よりは安楽死を選ぶに違いないと私は信じてゐる。要は満足すべき人生を送つた人は安楽死を望むだけの資格と能力を備えていると言えるのである。

時には臆面のなさも必要なのだが

問題は有象無象に属するわれわれはいかに生き、いかに死ぬかに懊惱せざるを得ない、ということだ。

既に古希を過ぎてから考へることは、我が人生を振り返つて、あのとき、ああしておけばよかつたとか、あの人に会つたときにこんなことを言つてみたらどうだつただろうか、などと愚痴めいたことしか浮かんでこない。これが三十歳代や、せめて四十歳代ならば、愚痴ではなくて反省して、まだやり直しのきく所もあるだろうから、もう一度ということもあり得るが、明日をも知れぬ年となつては、出てくるのは愚痴ばかりということになる。

私自身のことを多く書いて恐縮だが、我ながら精神的に偏つてゐる、というよりもかなりいびつであると考えてゐる。五十歳を過ぎるまで、何となくは考へていたが、五十歳を越えた頃から、正直とはバカ、眞面目というのは臆病、良心とは自己弁護、という点で殆どこの各々は同義語に近いということを確信するようになつたし、他人は決して眞の意味での本当のことは